

令和2年度 推薦入試入学試験【小論文】

教育学部学校教育教員養成課程 言語・社会教育系 社会選修

問1 問題の文章をもとに、日本の銀とオランダの商業活動の関係について200字以内でまとめなさい。

<解答例>

17世紀前半におけるオランダのアジアとの貿易品は香辛料であったが、17世紀中頃以降には絹、綿製品、銅、茶が重要な商品となった。これらを入手するためには貨幣となる銀が必要であった。このため、オランダは生野や石見で産出される銀を入手した。しかし、やがて日本の銀も枯渇し、幕府は1668年オランダ船への銀輸出を停止した。このことがオランダ商業の衰退の一因となり、イギリスの商業活動に取って代わられた。

(192字)

問2 江戸時代における日本の鎖国とはどのようなものであったか、17世紀の世界経済をふまえて、あなたの考えを600字以内で述べなさい。

<解答例>

江戸幕府は、スペインとポルトガルのキリスト教宣教師の来航、一方で日本人の東南アジアへの出入国を禁止し、貿易の統制を行った。これにより、江戸幕府はオランダ、清国、李氏朝鮮、琉球王国とのみ交易することになった。オランダと清国の船は長崎に入港し、オランダ人は出島に居住して交易するように制限された。こうした江戸幕府の政策は、一見世界との関わりを絶つかのようになされていた。しかし、現実には長崎のほか、薩摩、対馬、松前で交易が行われ、実際には世界経済システムのなかに組み込まれていた。問題の文章の著者もまた、この考え方に立っているといえるであろう。鎖国という言葉が使われるようになったのは、長崎のオランダ稽古通詞であった志筑忠雄がケンペル著『日本誌』の1章を「鎖国論」として訳した1801年以降のことであった。

17世紀の世界は、スペインとポルトガルの没落のなかで、オランダ、イギリス、フランス、ロシアなどの国々が、オスマン帝国、ムガル帝国、清国、東南アジアやアフリカ沿岸部、さらにはアメリカ大陸のアステカ帝国、インカ帝国との交易で繁栄を迎え、同時に覇権を争っていたのである。このような世界の状況を背景として、日本も世界経済のなかに

徐々に組み込まれるようになり，日本からは特に茶が輸出され，日本には蘭学として西洋の学問が受け入れられていったと考える。 (567 字)

< 観点：世界経済の中で鎖国に対する考え方を位置づけられているかを評価する。 >